

# 条件文における 「モダリティ制約」の研究史

竹 林 栄 実

## 1 本稿の目的・構成

本稿は、条件文（特にト・バ・タラ・ナラ条件文）における「モダリティ制約」の研究史を整理することを通して、「制約」の内実について考察するものである。

条件文のモダリティ制約とは、たとえば「家に帰ったら、勉強しなさい」「夏休みになったら、アルバイトしよう」とは言えるが、「タラ」を「ト」に置き換えると非文になるなど、条件文の後件において、命令や意志などの表現の生起に制約がかかる現象を指す。当初は「ト」「バ」「タラ」「ナラ」間の相違点として指摘されたこの現象は、「モダリティ制約（稲葉 1990、前田 2009）」「後件のモダリティー制限（三井 2002）」「主節末モダリティ成立制約（ソルヴァン・前田 2005）」のように、ある時期からモダリティの問題として扱われるようになった。

モダリティとは、これを積極的に文法研究に持ち込んだ仁田（1991）の定義では、命令を含む「働きかけ」や意志を含む「表出」のほかに、単に事態を述べる「述べ立て」なども設定されており、本来は命令表現や意志表現のみを指すものではない。しかしながら、条件文の研究において「モダリティ」という用語が用いられる場合、その議論の中心は、働きかけや、意志・希望などの表出のモダリティにおける共起の可能性・許容度に関することである。本稿では、このような、条件文のモダリティ制約という見方がどのように形成され、精密化されてきたかを確認する。なお、この問題を扱う研究のなかで、たとえば、「～しろ」「～しなさい」といった形式に「命令のモダリティ」といった呼称がつけられていることが少なくないが、本稿の目的はモダリティ制約の内実に迫ることであるため、あえて「モダリティ」という用語は用いず、「命令」「命令表現」のような用語を用いる。

まず、第2節では議論の前提を確認する。そして、第3節では、現代共通語における条件文のモダリティ制約について、それがどのように形成され、精密化されてきたかという観点から研究史を確認し、第4節では、方言研究・歴史的研究における条件文のモダリティ制約の研究史をまとめる。

## 2 前提

まず、以下の整理における前提を述べておく。条件文におけるモダリティ制約の研究は、条件文の後件に現れる表現を対象としているのであるが、論者によって、研究対象とするモダリティの範囲や、後件に現れる表現の分類が異なる場合がある。そのため、それらがどのように異なっているかという点について、2.1、2.2 で確認する。

### 2.1 モダリティの範囲

条件文のモダリティ制約に関する研究において、後件のモダリティをどの範囲まで対象としているかという点には相違がある。

1 節でも述べたように、仁田（1991）や日本語記述文法研究会（2003）が文法カテゴリーの一つとして想定するモダリティと、「条件文のモダリティ制約」というときのモダリティは、指す部分が異なる場合がある。仁田（1991）は、モダリティに「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」を設定し、基本的にすべての文にこの両方のモダリティがあるとしている。このうち、「発話・伝達のモダリティ」のなかには、「命令」などの「働きかけ」、「意志」などの「表出」だけでなく、(1) のような「述べ立て」や、(2) のような「問いかけ」も含まれる。

(1) 公園に行ってみたら、子供が遊んでいた。〈述べ立て〉（作例）

(2) 当日に急用で行けなくなったら、キャンセル料はかかりますか？〈問いかけ〉（作例）

(1) や (2) の「タラ」が「ナラ」や「バ」に置き換えられないことから、後件の制約は「述べ立て」や「問いかけ」の場合にも事実として存在することが分かる<sup>1</sup>。実際、稲葉（1990）は、モダリティとして話者の意志・希望・決意などを表す「意欲文」や話し手が聞き手に対して働きかける「命令・依頼文」のほかに、(3) (4) のような、事実を描写する「描写文」や、(5) のような、話し手の判断を表す「判断文」も含めて扱い<sup>2</sup>、タラ条件文とナラ条件文は「描写文」では成り立たないと述べる。

(3) \*中国へ行ったら、人口が多いです。〈事実〉（稲葉 1990 (20)）<sup>3</sup>

(4) \*買い物に行くなら、明日は混んでいますよ。〈事実〉（稲葉 1990 (23)）

(5) 明日だったら、鈴木さんはいるだろう。〈推量〉（稲葉 1990 (4b-1)）

---

<sup>1</sup> もちろん、仁田（1991）の「述べ立て」や「問いかけ」に当たる文について、「モダリティ」という概念を持ち込まずに論じる条件文の研究は数多く存在する。

<sup>2</sup> ほかにも、中島（1999a、1999b、2007）も稲葉（1990）と同様にいわゆる「述べ立て」の文を含めてモダリティ制約を扱っている。

<sup>3</sup> 用例を示す際、読みやすいよう表記を改めたところがある。また、用例の許容度の判定については、基本的には用例が掲載されている原論文の判断に従う。ただし、原論文に許容度の表記がないが、許容度について本文中で説明されている場合は、執筆者が附したものもある。

一方で、ソルヴァン・前田（2005）は、後件のモダリティが「述べ立て」（現象描写・判断）である場合はどの条件接続辞も成り立つとし、そのため扱う範囲を条件接続辞によって違いが現れる、働きかけや、意志・希望などの表出のモダリティに限定している。ほかに、奈良（2012）なども、後件が働きかけや、意志・希望などの表出のモダリティの場合に限って扱っている。

このように、条件文におけるモダリティ制約の研究においては、主に、働きかけや意志・希望の表出のモダリティの共起の可能性・許容度を分析することが中心となっているのである。そのため、以下では、主に後件が働きかけや意志・希望の表出のモダリティである場合を議論の中心に据える。

## 2.2 後件に現れる表現の分類

条件文の後件に現れる表現について、たとえば「命令表現」「すすめ表現」のような名称は共通していても、論者によって想定している具体的形式が異なる場合がある。

たとえば、鈴木（1978）では、「～ほうがいい」を「すすめ」に、「～う」を「意志」に、「～たい」を「希望」に分類している。

(6) 子供がかわいければ、甘やかすより苦勞させたほうがいい。

〈すすめ〉（鈴木 1978 (1, p.218)）

(7) 京都へ行ったら、先輩のところへ行こう。〈意志〉（鈴木 1978 (p.218)）

これに対して、北条（1964）は、それらをすべて「断定表現」として一括している。

(8) 春に {なったら／なれば／\*なると} 国へ {帰りたい。／帰ろう。}

〈断定〉（北条 1964 (6)）

(9) 彼に {会ったら／?会えば／\*会うと} そう言ってやる方がいい。

〈断定〉（北条 1964 (7)）

また、ソルヴァン・前田（2005）は、鈴木（1978）が「すすめ」に、北条（1964）が「断定表現」に分類した「～ほうがいい」という形式を、「忠告」と呼んだ。

(10) 変な音が出たら、修理に出したほうがいい。〈忠告〉（ソルヴァン・前田 2005 (p.31)）

ほかにも、「～てください」を「命令」に分類する北条（1964）に対し、堀（2004）は「依頼」に分類し、「命令」と区別している。

(11) 寒ければ窓を閉めてください。〈命令〉（北条 1964 (24)）

(12) もし、（私が）きれいに写っていれば、見せてください。

〈依頼〉（堀 2004 (p.132)）

このように、条件文の後件に現れる表現をどのように区切り、どのような名称をつけるかという点については論者によって相違がある場合があるため、注意が必要である。以下、

本稿では基本的に各論者の分類に従うが、北条（1964）が（8）のような文の後件の表現を「断定」としているように、ほかの多くの研究における名称（たとえば、（8）の後件の表現については、多くの研究は「希望表現／意志表現」と呼んでいる）との齟齬が大きいものについては、北条（1964）の命名である〈断定〉に加えて「（〈希望〉／〈意志〉）」のように示したり、「希望表現／意志表現」と呼んだりすることがある。

### 3 「モダリティ制約」の形成と精密化の観点

本節では、まず、3.1 で「モダリティ制約」という用語が用いられるようになった経緯を確認し、3.2 で制約の内実である後件の表現の種類について見る。続いて、制約との関係が指摘されてきたいくつかの観点に分け、精密化の過程を確認する。3.3 では前件述語の性質（動作性・意志性／状態性・非意志性）について、3.4 では前後件の主体の同一性について見る。さらに、3.5 では望ましさ、交換条件といった観点を確認する。なお、便宜上分けて確認するといっても、これらの観点はそれぞれ相互に影響し合うものである。

#### 3.1 「モダリティ制約」という用語

本項で、条件接続辞によって後件にともなうことのできる表現が異なる現象を「モダリティ制約」という用語で説明するようになった経緯を簡単に説明しておく。

はやく、条件文<sup>4</sup>の分析にモダリティの概念を用いたのが田中（1987）である。田中（1987）は、条件文の一番外側である文末にモダリティがあり、このモダリティが文全体を支配しており、それによって前後件の組み合わせに制約が見られるとする。そして、条件文の類型を叙実型、認定型、表出型、指示型に分け、ナラ条件文は、叙実型と、認定型のうち法則や多回的な事態を表す場合は成り立たないことを示した。さらに、この文の類型において、言語主体の態度により条件接続辞が選択されるとし、そのため条件接続辞それ自体にもモダリティを表す力があると述べる。このような立場から、田中（1987）は、こういったナラ条件文の制約の在り方の理由を、「ナラ」は「ト」「タラ」「バ」よりも主観性が高い（モダリティが高い）ためであると説明した。

それに対し、条件接続辞自体にはモダリティを設定しないのが田（1989）である。田（1989）は「本質的には後文のモダリティが前文の条件語を規定」（p.62）し、「どのような「述べ方」「表現意図」で表現するかによって、どの条件語を使うかが制約される」（p.62）としている。ただ、「逆に、どの条件語を用いるかによって後文のモダリティに変容が起こることもあるだろう」（p.62）とも述べ、条件接続辞と後件のモダリティとが相互に影響し

---

<sup>4</sup> 田中（1987）は、ナラ条件文を中心に分析をしている。

合っていると見ている。

さらに、田（1989）の指摘する現象を「モダリティ制約」と呼んだのは稲葉（1990）で、先に確認した田（1989）の主張を「どの条件接続辞を用いるかによって、後件の文のモダリティが制約される」（p.68）と言い換えた。すなわち、稲葉（1990）は、田（1989）の「後件のモダリティが条件接続辞を決める」という説明を、反対に「条件接続辞が後件のモダリティを決める」と言い換えたために、この現象がモダリティ制約と名づけられたのである。

このようにして、現在の、条件文のモダリティ制約という見方が形成されてきた。

### 3.2 後件述語の表現の種類

モダリティ制約の中身である、条件文の後件に現れる表現の種類については、1960年代から主に日本語教育の立場で研究がなされてきた。

条件接続辞間（「バ」「ト」「タラ」「ナラ」）の相違点の1つとして、後件にどのような表現をとるかという関心から、北条（1964）は、後件が命令表現の場合、タラ条件文やナラ条件文は制限がないが<sup>5</sup>、ト条件文は成り立たず、バ条件文は前件がいわゆる状態性述語の場合にのみ限定的に成り立つことを指摘している。

(13) それが {終わったら／\*終われば／\*終わると} 御飯を食べてしまいなさい。

〈命令〉（北条 1964（20，21））

(14) 時間が {あったら／あれば／\*あると} 電話をかけてください。

〈命令〉（北条 1964（25））

また、断定表現（意志や希望、義務（「～なければならない」）、すすめ（「～ほうがいい」）の表現を含む）についても、タラ条件文は制限がないが、バ条件文はすすめや義務表現をとりにくく、ト条件文は断定表現のなかでも意志や希望、義務、すすめなどの表現をとることができないことが指摘された。

(15) 彼に {会ったら／?会えば／\*会うと} そう言って {やる方がいい。／やらなければならない。} 〈断定〉（〈すすめ〉／〈義務〉）（北条 1964（7））（(9) 再掲）

(16) 春に {なったら／なれば／\*なると} 国へ {帰りたい。／帰ろう。}

〈断定〉（〈希望〉／〈意志〉）（北条 1964（6））（(8) 再掲）

宮島（1964）も、「バ」「ト」「タラ」について、後件に命令やすすめ、許可、希望、意志といった表現が現れる場合、基本的にタラ条件文は成り立つが、ト条件文は成り立たず、バ条件文は限定的に成り立つ（前後件の主体が同一で、前件が動作性述語の場合は、命令

---

<sup>5</sup> ただし、実際には、タラ条件文の後件に働きかけや、意志などの表出の表現が現れる割合は少なく、後件にそれらの表現が現れることを基本とするナラ条件文とは対照的であることが前田（2020）の調査によって明らかにされた。

表現をとることはできない) ことを指摘した。

(17) 電車で {乗ったら／\*乗れば}、歌はやめなさい。〈命令〉(宮島 1964 (p.321))

(18) 気分が {悪かったら／悪ければ}、帰ったほうがよい。〈すすめ〉(宮島 1964 (p.321))

(19) {飲みたかったら／飲みたければ}、飲んででもいいよ。〈許可〉(宮島 1964 (p.321))

(20) 金が {できたら／できれば} 山へ行きたいな。〈希望〉(宮島 1964 (p.321))

(21) 詳しい予定が {分かったら／分かれば}、またお知らせします。

〈意志〉(宮島 1964 (p.321))

これについては、国立国語研究所 (1964) も同趣旨のことを述べている。

加えて、後件が禁止や勧誘表現の場合についても、前件が動作性述語である場合にはバ条件文が成り立ちにくいことを川口 (1984) が示した。

(22) 酒を {飲んだら／\*飲めば} 運転をしてはいけません。〈禁止〉(川口 1984 (31))

(23) 仕事が {終わったら／\*終われば} 飲みに行きませんか。〈勧誘〉(川口 1984 (29))

さらに、田 (1989) は、調査の結果、バ条件文の後件に願望の表現をとる用例は見られないとしている。

(24) 気づいたことがあったらすぐ捜査本部に連絡してほしいと言い残して帰っていた。

〈願望〉(田 1989 (p.64))

(25) 貴方がどうしてもと言うなら紀彦だけでも戻してほしい。

〈願望〉(田 1989 (p.67))

ここまで、後件にどのような表現が現れるかという点について、表現の種類を増やしながら整理が施されてきた。ただし、それが覆る場合があることも指摘されている。

先に見たように、北条 (1964) では、バ条件文は義務表現をとりにくいとされていたが、文全体が話し手の決意を表す「意欲文」の場合は、後件に義務表現をとる用例が見られることを田 (1989) が指摘した。

(26) どんなに難しくても、やらなければ無実の罪を背負って刑務所へ行かなければならない。〈義務〉(田 1989 (p.66))

ここまで見てきた研究では、基本的にタラ条件文、ナラ条件文は制約がなく、バ条件文は場合によって制約が強くなり、ト条件文は制約が特に強いと指摘されてきた。しかし、制約が強いとされるト条件文についても、その制約が緩まる場合がある。

まず、バ条件文の場合と同様に、話し手の決意を表す「意欲文」の場合は、後件が義務表現でもト条件文の用例が見られることを田 (1989) が指摘している。すなわち、これについては、場合によって制約が緩まりやすいバ条件文だけでなく、基本的に制約の強いト条件文にも当てはまるのである。

(27) 今度は遅刻すると先生に銀貨二枚あげなくてはならない。〈義務〉(田 1989 (p.64))

また、後件に命令表現や義務表現をとる場合があることを中島 (1999a, 1999b, 2007)

が、意志表現をとる場合があることを国立国語研究所（1964）が示している（それぞれ、詳しくは 3.3、3.4 で詳述する）。

さらに、文全体が「警告」「脅迫」といった意味を表す場合には、後件が意志表現であってもト条件文が成り立つことを前田（1995、2009）が指摘している。

(28) 家庭科の授業に出ないと、卒業させません。〈意志〉（前田 1995、2009（17／147））

(29) 動くと撃つぞ。〈意志〉（前田 1995、2009（18／148））

また、ト条件文の後件の要素を主題化すると、後件に命令や意志、希望表現をとる文が成り立ちやすくなるという村松（1992）の指摘もある。

(30) \*太郎が欲しがると（あなたは）あげてください。〈命令〉（村松 1992（41、42））

(31) ?あなたは、太郎が欲しがるとあげてください。〈命令〉（村松 1992（43））

(32) \*横浜へ行くと（私は）中華料理が食べたい。〈希望〉（村松 1992（44、45））

(33) ??私は、横浜へ行くと中華料理が食べたい。〈希望〉（村松 1992（46））

加えて、特定の聞き手や読み手を前提とする対話的談話において、ト条件文の前件が静的事態である場合、後件に願望表現をとる例が見られることを奈良（2012）が指摘した。それは、前件で「こう」を用い、現在共有している状況のなかで程度が著しいことを示す場合に、後件で話し手の願望を述べつつ、聞き手の意志を確認するパターンに限られるとされている。

(34) こうも暑いと、熱いものはあんまり食べたくない？〈願望〉（奈良 2012（32））

(35) こう寒いと温泉行きたいよね。〈願望〉（奈良 2012（33））

このように、実際の用例や談話での使用例を見てみると、ト条件文の後件に、働きかけや、意志などの表出の表現が現れており、ト条件文は制約が強いということの例外が認められるのである。

なお、従来制約がないとされてきたタラ条件文<sup>6</sup>についても、実は制約があり、(36) のような順序づけの根拠を表すタイプ<sup>7</sup>は成り立たないことを有田（2020）が明らかにした。

---

<sup>6</sup> ただし、「タラ」は前件より後に後件が生じる場合を表すため、(i) のようにこれに当てはまらない場合は制約が生じるという前田（1995、2009、2020）の指摘がある（また、このような時間関係の解釈には個人によって異なることがあり、許容度にゆれが出る場合があることをソルヴェン・前田（2005）が指摘している）。

(i) ディズニーランドに {行くなら／\*行ったら} 俺も連れて行け。〈命令〉（前田 2020（18））

また、「タラ」は時間的關係を表す意味が強く、前件の実行との時間的關係を示すが、「ナラ」は条件的意味を表しやすく、前件の決定との時間的關係を示すということも説明されている。そのため、基本的に制約のないとされるナラ条件文についても、(ii) のように成り立たないことがあるとする。

(ii) (私が) {着いたら／\*着くなら} 電話します。〈意志〉（前田 1995、2009（25／153））

そして、こういった「タラ」「ナラ」の示す意味の違いにより、(iii) のような、「タラ」「ナラ」ともに成り立つ文でも、表わす意味が異なりうることも前田（1995、2009）に指摘がある。

(iii) あなたが {行ったら／行くなら} 私も行きます。〈意志〉（前田 1995、2009（19、20／146））

<sup>7</sup> 有田（2020）が設定する、順序づけの根拠を表すタイプとは「条件節が後件の命令・依頼が成立する単なる仮定的状況を設定しているとは見せず、むしろ、何を命令・依頼するか、その優先順位（To-Do-List）そのものに影響を与えているように見える」（pp.154-155）例である。



(36) {断るなら／\*断ったら}、女優をやめろ。〈命令〉(有田 2020 (35))

本項の最後に、ここまで見てきた制約が生じる理由についての考察を概観する。

ト条件文の制約については、永野 (1975) が、「ト」は条件としての客観性が強い、主観性の強い後件述語とは呼応しにくいと説明している。それに対して、寺村 (1981) は「君が行くと皆{よろこぶだろう／よろこぶにちがいない}」といった文が成り立つことを理由に、主観性の点で制約がかかるというよりも、ト条件文は必然の結果を表す形式であるために制約がかかるのだとする。そして、タラ条件文は偶然の結果を表し、バ条件文は偶然の場合も表すが必然的帰結を表す比重の方が大きいため、このようなモダリティ制約の様相になっているのだと考察している。さらに藤城 (2000) は、蓮沼 (1993) の、「ト」は観察者の視点で述べる場合に用いられる、という事実的用法(過去に生じた一回的な事実を表す用法)における指摘を仮定的用法に適用し、そのためにト条件文の後件には働きかけや、意志・希望の表出の表現が現れないのだと述べる。

バ条件文におけるモダリティ制約の理由については、堀(2004)の考察がある。堀(2004)は、タラ条件文は時間関係で結びついているのに対し、バ条件文は事柄の関係で緊密に結びついており、交換条件をも成り立たせるような前後件の事柄の強い結びつきが基本的な意味であるとする。そして、この緊密さから、前件が動作性の場合、ある動作により現実世界に変化が生じ、その結果についての話者の判断のみが許容されるため、後件に制約が生じるのだと説明している。

このように、条件文のモダリティ制約について、例外も含めて多くの事実が指摘されてきたが、この制約にどのような要因がかかわっているのかという点を次項以降で見ていく。

### 3.3 前件述語の性質(動作性・意志性／状態性・非意志性)

前項で述べたとおり、バ条件文のモダリティ制約は揺れが大きい、その揺れを生む要因の一つとして、前件述語が動作性であるか状態性であるかという点が指摘されている。

まず、バ条件文の場合、後件に命令表現をとることができるのは、前件が動詞の否定形、形容詞、動詞「ある」、可能動詞の場合のみであるということを北条 (1964) が示した。

(37) 分からなければ手を挙げなさい。〈命令〉(北条 1964 (23))

(38) 寒ければ窓を閉めてください。〈命令〉(北条 1964 (24)) ((11) 再掲)

(39) 時間があれば電話をかけてください。〈命令〉(北条 1964 (25)) ((14) 再掲)

(40) 食べられれば食べてください。〈命令〉(北条 1964 (26))

この現象を言い換えると、国立国語研究所 (1964) の、前件が動作性述語の場合、後件が命令表現であり、前後件の主体が同一であると、バ条件文は成り立たないという指摘になる(前後件の主体の同一性については次項で詳しく確認する)。



(41) これは、お作りに {なったら/\*なれば} すぐ召し上がって下さい。

〈命令〉(国立国語研究所 1964 (p.152))

国立国語研究所(1964)は「動作性」という用語を用いたが、これを北条(1964)に適用すると、北条(1964)は、バ条件文は前件が状態性述語の場合には命令表現をとることができるという主張であることが分かる。

そして、後件が命令だけでなく、意志表現の場合も同様であることを鈴木(1978)が指摘し、バ条件文が成り立たない理由を、語構成上「タリ」を含む「タラ」と異なり、「バ」は完了の意味を持たないためだと説明している。

(42) 京都へ {行ったら/\*行けば}、先輩のところへ行こう。

〈意志〉(鈴木 1978 (p.218)) ((7) 再掲)

さらに、後件が意志や希望の表出の場合について、川口(1984)は、動作性述語のなかでも意志性の有無に着目し、前件が動作性述語で意志性があり、かつ前後件の主体が同一であると、(43)のようにバ条件文は成り立たないことを示した<sup>8</sup>。

(43) (わたしは) ごはんを {食べたらず/\*食べれば}、勉強します。

〈意志〉(川口 1984 (38))

(44) 雨が {降ったら/降れば}、うちで仕事をします。〈意志〉(川口 1984 (43))

なお、川口(1984)はすすめや希望表現の場合もバ条件文は成り立ちにくいとしている点で鈴木(1978)と異なる。両者とも、想定している形式は同様である(「すすめ」は「～ほうがいい」、「希望」は「～たい」)。鈴木(1978)には、前件が動作性述語で前後件の主体が同一であり後件にすすめや希望表現が現れるバ条件文の用例は挙がっていないが、川口(1984)は以下の用例を挙げている。

(45) \*うちに帰れば、すぐうがいをしたほうがいい。〈すすめ〉(川口 1984 (30))

(46) \*東京に行けば、洋服を買いたい。〈希望〉(川口 1984 (p.9))

前田(1995、2009)は、この「意志性」の観点を後件が働きかけの表現の場合にも適用し、前件の述語が意志的な動作であればバ条件文は成り立たないが、そうでない場合は(47)のようにバ条件文でも成り立つことを示している。

(47) そう思いたければ思いなさい。〈命令〉(前田 1995、2009 (10/139))

この意志性の問題について、1990年代以降に行われた複数のアンケート調査により、動詞が語彙的に内包する意志性ではなく文脈から読み取れる意志性の問題であることが明らかにされた。

まず、前件述語の性質を細かく分け、後件が意志、命令、依頼、忠告(すすめ)、勧誘、

---

<sup>8</sup> ただし、川口(1984)は、前件が動作性述語で意志性がなく、後件が意志や希望表現である場合、(44)のようにバ条件文でも成り立つものの、タラ条件文の場合は「一定の時間が経過し、ある時点に至ることを後件が起こることの条件としている表現」(p.9)であるのに対し、バ条件文の場合は時間の継起を条件としているわけではないという点で、タラ条件文と同じ内容を表してはいないとしている。

希望表現の場合についてアンケート調査を行なったのが永井（1992）である。その結果、基本的にバ条件文は、前件が動作性述語で他動詞を用いたもの（「宿題を全部やる」25.4%<sup>9</sup>）、前件が動作性述語で自動詞を用いたもの（「仕事が終わる」44.1%）、前件が状態性述語で動詞を用いたもの（「招待券がある」72.9%）、前件が状態性述語で形容詞を用いたもの（「都合がいい」89.8%）の順に許容度が上がっていくことが示された。

(48) {??宿題を全部やれば／?仕事が終われば／招待券があれば／都合がよければ}、映画を見なさい。〈命令〉（永井 1992（5b, 6b, 7b, 8b））

そして、バ条件文とは対照的に、タラ条件文は、前件の述語が動作性・状態性であることとは関係なく適当と判断されるが、前件が状態性述語である場合には、動作性述語の場合よりも許容度が若干下がるという（「宿題を全部やる」100%、「仕事が終わる」98.3%、「招待券がある」91.5%、「都合がいい」78%）。

(49) {宿題を全部やったら／仕事が終わったら／招待券があったら／都合がよかったら}、映画を見ようと思う。〈意志〉（永井 1992（1c, 2c, 3c, 4c））

この永井（1992）の調査により、語彙的な意志性で文の許容度が変わるという予想が立ったが、それに対し、稲葉（1990）は、前件述語が動作性であってもそれが第三者の意志により決められる（話し手とは無関係のところで設定される）のだと解釈されると許容度が上がる、つまり、文脈によって読み込まれる意志性が文の許容度を左右することを明らかにした。(50) は、アンケート前の予想では成り立たないと予想していたが、調査の結果、許容度が比較的高かった文である。

(50) ??京都へ行けば、おみやげを買おうと思います。〈意志〉（稲葉 1990（13））

これについては、後件が助言、許可、義務、希望表現の場合、前件の主体が第三者であるか、または前件述語が他動性の弱い動詞（自動詞のうち無意志的動詞など）であると許容度が上がることを堀（2004）も指摘している。

さらに、後件が働きかけや表出の表現である場合、バ条件文は、前件が第三者を主体とする事態である、あるいは聞き手にはコントロールできない事態である場合に許容度が上がることをソルヴァン・前田（2005）が示し、その理由を「聞き手や話し手に制御できない事態が後件の生起を左右するという意味的な関係が、まさに条件そのものであると考えられるから」（p.36）と説明している。

(51) 彼がだめだと言えば、やってはいけませんよ。〈禁止〉（ソルヴァン・前田 2005（7））

(52) あなたが誘ってくれば、私もそのコンパに参加したいと思います。

〈希望〉（ソルヴァン・前田 2005（p.31））

また、なぜバ条件文は前件述語によってこのような制約が起こるかという点について見

<sup>9</sup> 以下、永井（1992）の調査において、許容度の判定の選択肢「○」「?」「×」のなかで「○」と回答したパーセンテージを示す。

解を述べたものに、藤城（2000）、川口（1984）がある。藤城（2000）は、前件が状態性述語の場合、後件が依頼表現でもバ条件文が成り立つ理由について、前件が後件実現の必要条件として選ばれるのではなく、すでに選ばれている条件としてその条件の下でどうなるかということが後件に示されるため、後件実現のための必要条件を選んで示すという意識が弱まり、依頼表現ともなじむのだと説明している。

そして、川口（1984）は、前件が動作性述語（意志性あり）で前後件の主体が同一であり、後件が意志や希望表現である場合にバ条件文が成り立ちにくい理由について、「自分の意志的行為を仮定した上で、自分の意志的行為を行うこと自体が不自然だから」（p.9）と述べている。

これらの主張は、先に見た、前件が第三者の意志によって決められる事態であれば制約が緩まるということと同根である。はじめは前件が動作性か状態性かという点に着目されていたが、それは本質的には意志性の問題であったということが明らかにされてきたのである。そして、この意志性とは、動詞の語彙的性質ではなく、文脈的に設定されるものであった。

なお、前件述語の状態性・非意志性がモダリティ制約を緩めることについては、バ条件文だけでなく、ト条件文においても成立することが中島（1999a、1999b、2007）によって指摘されている。中島（1999a、1999b、2007）は、ト条件文について、前件述語が状態性・非意志性である場合、自然談話においては命令表現が、書きことばの調査では義務表現が許容される場合があることを示した。

（53）だから [名字] ですと 5000 部に持って行けとかいうようなこれから言いますが  
〈笑い・複〉[名字] でしたらそういったことは、ありえないと思いますので。

〈命令〉（中島 1999a、2007（49／20，p.161））

（54）悲しそうな役場のサイレンがとぎれとぎれにほえだすと、この町には何事もなく  
ってもノリオたちは穴ぐらに入らなければならない。

〈義務〉（中島 1999b、2007（12／12，p.175））

### 3.4 前後件の主体の同一性

モダリティ制約への影響については、このほかに、前後件の主体が同一かどうかという観点もある。

一般的に、ト条件文は後件に現れる表現が制約されやすいのに対し、バ条件文はト条件文に比べると後件に現れる表現が制約されにくい、この状況が、前後件の主体の同一性によって変化することがある。

ト条件文については、国立国語研究所（1964）が、前後件の主体が同一でない場合は、

後件に通常ト条件文がとらないとされる意志表現をとることができるとしている。

(55) これからは、竹あんさんか、竹兄哥とか言わねえと承知しねえゾッ！

〈意志〉(国立国語研究所 1964 (p.153))

(56) そうしないと手続きを受け付けないというわけです。

〈意志〉(国立国語研究所 1964 (p.153))

(55) では、「竹あんさんか、竹兄哥とか言う」という動作をする人と、「承知しない」人は別人であり、(56) では、「そうしない」人と「受け付けない」人は別人である。

一方、本来はそれほど厳しくないはずのバ条件文のモダリティ制約が、前後件の主体が同一の場合に厳しくなることがある。

宮島 (1964)・国立国語研究所 (1964) は、バ条件文の前後件の主体に着目し、前後件の主体が同一で、かつ前件が動作性述語の場合は、命令表現をとることができないということを指摘している。

(57) 電車で {乗ったら／\*乗れば}、歌はやめなさい。

〈命令〉(宮島 1964 (p.321)) ((17) 再掲)

これについては、意志表現も同様であることを鈴木 (1978) が、希望表現に関しても同様であることを川口 (1984) が指摘している。

(58) 京都へ {行ったら／\*行けば}、先輩のところへ行こう。

〈意志〉(鈴木 1978 (p.218)) ((7) 再掲)

このうち、後件が意志や希望の表出である場合については、前田 (1995、2009) にさらに詳しい考察があり、前件述語が意志的で、前後件の主体が同一であると、(59) (60) のように、バ条件文は成り立たないと述べる ((61) のように前件が非意志的である場合は成り立つ)。

(59) 試験に {合格したら／\*合格すれば}、海外旅行に行く。

〈意志〉(前田 1995、2009 (11/140))

(60) 私が {買うなら／\*買えば}、イタリアの車を買う。

〈意志〉(前田 1995、2009 (12/141))

(61) ドラフトで一位に指名されなければ、入団しません。

〈意志〉(前田 1995、2009 (15/144))

また、前後件の主体が異なればバ条件文でも成り立つものの、前件の主体と後件の主体が同じ動作をする場合に限られることも指摘された。

(62) あなたが行けば私も行きます。〈意志〉(前田 1995、2009 (13/142))

(63) ?あなたがアメリカへ行けば、私はヨーロッパへ行きます。

〈意志〉(前田 1995、2009 (14/143))

前項で確認したように、バ条件文は前件述語が動作性述語 (意志的) である場合成立し

にくい、ここまで見てきたとおり、前後件の主体が異なっていれば制約が緩まることがあるということが明らかにされてきた。ただ、川口（1984）は、先の前田（1995、2009）の主張と異なり、前後件が異主体である場合は、前後件の主体の動作が同じであるか否かにかかわらずバ条件文が成り立つとしている。

（64）彼が来れば、私は帰ります。〈意志〉（川口 1984（41））

つまり、前後件の主体が異なっている、前後件の主体が同じ動作をする場合に限られるかどうかという点については見解が一致していないのである。

また、前後件の主体の同一性について、前項の前件述語の性質の観点と同様、アンケート調査によって詳細を明らかにしようとする研究もある。

ソルヴェン・前田（2005）の調査によると、前件が動作性述語で、後件が働きかけ（命令・依頼、禁止、忠告（すすめ）、義務・勧誘、願望）の場合、前後件が異主体であるとバ条件文の支持率が高い（ただし、タラ条件文の支持率には及ばない）。しかしながら、働きかけのうち許可の場合は、前後件が同一主体であってもタラ条件文以上に支持率が高いことが示されており、その理由を、条件文が交換条件（「相手の要求を受け入れる代わりに相手に出される要求」（p.34））として機能し、誘導推論の解釈<sup>10</sup>を許すからであるとしている（交換条件については次項で詳しく見る）。

（65）買い物をしてくれれば、部屋の掃除はやらなくてもいいですよ。

〈許可〉（ソルヴェン・前田 2005（24））

加えて、ソルヴェン・前田（2005）は、誘導推論の解釈が生じやすい場合、後件に働きかけや、意志などの表出の表現が現れるバ条件文が許容されやすいことを明らかにしている。たとえば、（66）の支持率が高いのは、前件が第三者の、聞き手がコントロール不能（生起するか不明）な行為を表している、典型的な「条件」を表す文であり、誘導推論の解釈が生じやすいためであるとする。

（66）あの人がそう言えば、そうしなさい。〈命令〉（ソルヴェン・前田 2005（8））

それに対し、（67）の文は、「地震が起こらない場合は出勤しなくてよい」ということを表しているわけではなく、「前件は後件の条件というより時間を規定」（p.33）する。すなわち、「前件が後件の生起を左右するという典型的な条件文が持つ意味は表していない」（p.33）ため、許容度が落ちるのだとしている。

（67）もし地震が起これば、ただちに救出活動のために出勤せよ。

〈命令〉（ソルヴェン・前田 2005（9））

また、このような条件のあり方に着目した議論として、井上（2007）は、バ条件文を細分化し、仮定条件（前件事態の実現を前提としない仮定上の条件）ではなく、実現前提条

---

<sup>10</sup> 誘導推論の解釈を許す文とは、たとえば（65）（66）のように、「買い物をしなければ、部屋の掃除をしないとイケない」「あの人がそう言わなければ、しなくてよい」という裏の意味が読み取れる（そのように推論される）文である。

件（前件事態の実現を前提とする条件）を表す場合については、前後件の主体が異なるとき、後件が命令や禁止、勧誘、許可などの表現であると、バ条件文は成り立たないということを示した。

(68) 私が {話し終わったら／\*話し終われば}、スイッチを切りなさい。

〈命令〉(井上 2007 (45))

このように、前後件の主体が同一か否かという観点は、主にバ条件文の成立にかかわるものとして指摘されてきたのである。

### 3.5 望ましさ、交換条件

「望ましさ」や「交換条件」がバ条件文の成立にかかわるということも指摘されている。望ましさの観点からバ条件文のモダリティ制約を分析したのが堀(2004)である。堀(2004)は、条件文の前後件の望ましさは一致する<sup>11</sup>という「Desirability の仮説」を提唱した Akatsuka (1983)、赤塚 (1998) の考え方に沿って分析を行なった。その結果、前後件が「一望ましさ」「一望ましさ」である (69) のような文よりも、前後件が「+望ましさ」「+望ましさ」である (70) のような文の方が適格と判断される割合が高いことを指摘した。

(69) 今度のプロジェクトですけど、彼がやりたいと言えば、やらせてあげなければなりません。〈義務〉(堀 2004 (x))

(70) 金を出せば、命だけは助けてやる。〈意志〉(堀 2004 (aj))

さらに、(71) のような交換条件を表す文は、望ましさを交換しているのだと説明している。

(71) 掃除を手伝ってくれば、おこづかいをあげる。〈意志〉(堀 2004 (af))

この交換条件の観点について詳しく分析したのが、ソルヴァン・前田 (2005) である。ソルヴァン・前田 (2005) は、アンケート調査を行い、その結果、後件に許可や許容<sup>12</sup>、意志表現が現れるバ条件文について、交換条件のニュアンスが生じる場合、支持率が高くなることを明らかにしている。たとえば、(72) は前後件が同一主体だが、タラ条件文よりも支持率が高い。これは、交換条件のニュアンスによるとする。すなわち、前件に話し手が望むものを示し、後件に聞き手の望むものを与えるということを示すと、文全体で交換条件を表すことになり、それにより前項で言及した誘導推論の解釈が生じ、許容度が高くなると説明している。

<sup>11</sup> たとえば、(70) (71) は、前件事態の実現は話し手にとって望ましく、後件事態の実現は聞き手にとって望ましいものであるし、反対に (69) は前件事態の実現は話し手にとって望ましくなく、後件事態の実現は聞き手にとって望ましくないものである。

<sup>12</sup> ソルヴァン・前田 (2005) は、働きかけを後件主体が二人称であるもの、表出を後件主体が一人称であるもの、と区別し、前者に「許可」、後者に「許容」を入れている（形式はどちらも「～てもいい」）。

(72) 買い物をしてくれれば、部屋の掃除はやらなくてもいいですよ。

〈許可〉(ソルヴェン・前田 2005 (p.31)) ((65) 再掲)

日本語記述文法研究会 (2008) も、ソルヴェン・前田 (2005) と同様に、後件が意志表現で交換条件を表す場合、(73) のように、前件が動作性述語であってもバ条件文が成り立つことを指摘し、その際に文のニュアンスとして「従属節の事態が起こらなければ主節の事態も起こらず、主節の事態の実現にとって従属節の事態が絶対に必要である」(p.102) という意味が強く現れることを指摘している。

(73) 1 万円くれれば、その仕事を引き受けよう。

〈意志〉(日本語記述文法研究会 2008 (p.102))

これまでの、バ条件文は後件が意志表現で交換条件を表す場合、動作性述語も前件にとるという指摘について、奈良 (2012) は、小説やインターネットから用例を収集し、その実態を調査した。その結果、交換条件を表すのはバ条件文が多いことが示された。その理由については、バ条件文の場合は前後件の因果関係が対等に表されるのに対し、タラ条件文の場合は「タ」の完了の意味あいにより前件の完了後に後件が起こるという積極的でない意志を表すため、交換条件の意味とそぐわないからだと説明している。また、ナラ条件文の場合も、前件が真であることを仮定する形式であるため、交換条件とは合わないのだと述べている。

このように、バ条件文の前件述語が動作性述語の場合、モダリティ制約が厳しくなる (3.3) が、「+望ましさ」を持つ場合や「交換条件」を表す場合には、その制約が緩まるということが明らかにされた。

### 3.6 3 節のまとめ

現代共通語における条件文のモダリティ制約の研究史について、それが形成され、精密化されてきた過程を、モダリティ制約との関係が指摘されてきた観点も含め概観した。はじめに述べたように、それぞれの観点は相互に影響し合うものであった。概括すると、特にバ条件文については、前件述語が動作性 (意志性あり) の場合には制約が厳しくなるが、前後件が異主体である場合や、望ましさを交換するといった意味合いを表す場合はその制約が緩まるのである。

## 4 時空間変異

以上、確認してきたように、条件文のモダリティ制約は、基本的に現代共通語を対象として研究されてきた。その研究成果に基づき、地理的に異なる場所の言葉について確認す



る研究（方言研究）や、時間的に遡って確認する研究（歴史的研究）も行われている。以下、4.1 では方言研究について、4.2 では歴史的研究について見ていく。

#### 4.1 方言研究

方言研究においては、秋田標準語・秋田方言では、後件が命令などの要求を表す場合は共通語と同様に「タラ」を使用するが、禁止を表す場合には共通語と異なり（74）のように「バ」を使用することを日高（1999）が明らかにしている。

(74) ソゴサ クルマ トメレンバ ダメンダ。

（そこに車を{止めたら/\*止めれば}ダメだ。）〈禁止〉（日高 1999（7））

ただ、日高（1999）においては「モダリティ制約」という用語は使用されていない。「モダリティ」という用語が用いられるようになったのは、三井（2002）以降である。三井（2002）は、調査項目に「後件のモダリティ制限」という項目を立て、津軽方言では、バ条件文は共通語より制約が緩く、後件に勧誘、希望、意志表現をとることができることを明らかにした（ただし、命令・依頼表現は不可）。

(75) シゴド {オワレバ/オワタラ} ノミニ エグベシ。

（仕事が終わったら飲みに行こう。）〈勧誘〉（三井 2002（11））

(76) ココ {オワレバ/オワタラ} ダイガクサ エギテァナ。

（高校を卒業したら、大学に行きたいな。）〈希望〉（三井 2002（12））

その後、櫻井（2002）は、三井（2002）に挙げられた調査文を用い、山形市方言の条件表現形式「ドギ」の後件のモダリティ制約について調査を行なった。その後も、櫻井（2008）の山形市方言の調査、竹田（2012）の山形市・米沢市方言の調査がなされたほか、三井（2015）による熊本市方言・鹿児島市伊集院町方言の調査や、有田・岩田・江口（2019）の鹿児島県甕島里方言の調査によって、条件文におけるモダリティ制約の、共通語との共通点や相違点が明らかにされつつある。

#### 4.2 歴史的研究

現代共通語において概念形成された「条件文におけるモダリティ制約」という考え方の、歴史的研究への影響は大きくない。

まず、上代語においては、中島（2005、2007）が、古代語の「未然形+バ」について『万葉集』を資料とし調査・分析を行なった結果、前件が動作性の述語か状態性の述語かにかかわらず、命令や願望、意志などの表現が現れる（後件にモダリティ制約がない）ことを指摘している。そして、中古語においても、中村（2011）が、古今和歌に見られる条件表

現について、後件に着目し調査するなかで、「未然形＋バ」によって表される仮定条件文の後件に、意志や命令、禁止表現が現れていることを指摘した。

(77) 名にしおはばいざ言問はむ。都鳥わが思ふ人はありやなしやと

〈意志〉(中村 2011 (2))

(78) 久方の天の河原のわたしもり君渡りなば梶かくしてよ 〈命令〉(2011 (3))

一方、原因理由を表す「已然形＋バ」について、矢島 (2023) は、(79) のような例が見られるものの、基本的に平安和文において後件に命令表現をとる例が非常に少ないことを明らかにした。

(79) 登時参るべきよし、おほせごとあれば、さる心地させたまへ。

〈命令〉(矢島 2023 (11))

このような研究はあるものの、上代・中古においては、条件接続辞の種類が乏しいこともあり、後件のモダリティ制約に着目されにくいものと思われる。そのため、後件のモダリティ制約に着目した研究は、条件接続辞の用法の転換や、条件接続辞の種類の増加が生じた時期である中世末期から近世期を対象としたものが多い。

上代から継続して見られる「バ」については、近世中期以降の上方語・関西語における打消条件句において、「未然形＋バ」は「仮定形＋バ」と対照的に、(80) のように後件に命令や意志、推量などの表現をとることが基本であることを矢島 (2008, 2013) が示した。

(80) お袋さまにあわす事ならずばこなたの手に掛けて殺さしやれ / \。

〈命令〉(矢島 2008, 2013 (3/2, p.198))

また、山口 (1996) によれば、「ホドニ」は中世鎌倉期頃までは単に後件の事態が存在・生起する場面を示していたが、中世室町期頃に原因・理由を表すようになったことで、命令表現などの根拠を示す用法が生まれたという。この「ホドニ」は中世末期から近世期にかけて衰退していくが、そのなかで、後件が命令や依頼表現の場合には残りやすかったことを小林 (1973, 1977) が指摘している。

条件接続辞に由来する複合語の共起制限についても、矢島 (2010, 2013) の研究がある。「ソレデハ」「ソレナラ」は、後期江戸語において、後件に命令や意志、推量などの表現をとる場合、喃本・洒落本、滑稽本の『浮世風呂』あたりの時期までは「ソレナラ」ばかりが用いられるが、その後、滑稽本『八笑人』や人情本『春色梅児誉美』あたりの時期になると、「ソレデハ」が命令や意志、推量といった表現を後件にとるようになるという。

(81) 「(略) もふ晩には叱らぬほどに、来てくれ給へ」といふゆへ、「そんなら行かふ」

と約束して咄にゆきける。〈意志〉(矢島 2010, 2013 (14/14, p.275))

(82) 眼七「ム、それでは居ねへとでもいおふ」

〈意志〉(矢島 2010, 2013 (16/16, p.276))

中世末期から近世期には、新しく生まれた接続辞があるが、そのうちの1つである「ト」

について、近世期の狂言台本においては、現代共通語と異なり、ト条件文の後件に意志表現が現れるという小林（1987、2002、1996）の指摘がある。

（83）早々国元へ行ト迎ヲ登セウ〈意志〉（小林 1996（50, p.223））

ここまで見てきたように、条件接続辞の用法が転換したり、新たな条件接続辞が生まれたりする流れと後件の表現の制約は不可分な問題であり、それゆえに、歴史的研究においても、（モダリティ制約とは呼ばれていないものの）後件のモダリティ制約に当たる現象が指摘されてきたのである。しかしながら、条件文のモダリティ制約それ自体を明らかにすることを目的としてなされた研究ではなく、部分的な指摘にとどまるものが多い。

これに対して、竹林（2024a）は、現代共通語でモダリティ制約がもっとも厳しいとされるト条件文が近世期から明治・大正期には後件に意志表現や義務表現などを伴うことがあり、現代共通語と比べて制約が緩かったことを示した。

（84）はる→ばば「あれさ老婆さんもういいはね。翌見たらまた有かもしれないはね」ばば「何でも夜が明ると昼まで上て見やう。何様したか」〈意志〉（竹林 2024a（9））

（85）小つゆ→のち八「おまへはずつとあつちへ往てねゑや」のち八→小つゆ「ずつとあつちへいてねると船頭様んの茶をわかつてやらにや成ぬ」〈義務〉（竹林 2024a（7））

さらに、後件に意志表現を伴うト条件文について網羅的に調査を行なった竹林（2024b）は、近世期や明治・大正期においては（86）のような例が見られたが、現代に至ると見られなくなり、どの時期においても中心的なタイプとして現れる（87）のような文、すなわち、前件が聞き手の動作であり、文全体として脅しを表すト条件文がモダリティ制約の例外として現代共通語にも残っていることを指摘した。

（86）坊さんになるとおいらが又可愛がつてやるよ。〈意志〉（竹林 2024b（3））

（87）あんまり寐なんすとかすぐりえすよ。〈意志〉（竹林 2024b（1））

（86）と（87）の違いはまさに、前件述語の性質（3.3）や前後件の主体の同一性（3.4）、望ましさ、交換条件（3.5）といった観点によって説明されるべきものである。したがって、3節で挙げた現代共通語の研究が指摘してきた観点を取り込んだ歴史的研究が俟たれる。

## 5 まとめ

以上、条件文における「モダリティ制約」の研究史を確認することで、モダリティ制約と呼ばれる現象の内実を明らかにした。条件文において、本来的な意味でのモダリティ制約自体は幅広く存在するが、「モダリティ制約」と呼ばれる現象は、モダリティのなかでも、聞き手に働きかけるものや、話し手の意志を表出するものを中心とする。そのなかで、後件にとる表現の制約について、条件接続辞の種類による違いが基礎としてありながら、前件述語の性質（動作性・意志性／状態性・非意志性）や前後件の主体の同一性、望ましさ

や交換条件などといった複数の要素が絡み合ったところに決定されるものであることが発見され、そういった観点を軸に議論が進展してきた。また、条件文のモダリティ制約に関する議論は、4 節で見たように、現代共通語に限らず時空間的な広がりを見せる。方言研究や歴史的研究においても、この問題を扱う際には、本稿で述べたようなことを理解しておく必要があろう。

## 参考文献

※本論文の趣旨に沿い、以下では現代共通語の研究、方言の研究、歴史的研究に分けて参考文献を提示する。かつ、提示順は年代順とする。

### 現代共通語の研究

国立国語研究所（1964）『現代雑誌九十種の用語用字 第3分冊 分析』秀英出版

北条淳子（1964）「条件の表わし方」『日本語教育』4・5, pp.73-80

宮島達夫（1964）「バとトとタラ」『講座現代語 第6巻 口語文法の問題点』明治書院, pp.320-374

Alfonso, Anthony. (1966) “Japanese Language Patterns” A structural approach vol.2, pp.650-699

森田良行（1967）「条件の言い方」『講座日本語教育』第3分冊, 早稲田大学語学教育研究所, pp.24-47

山口堯二（1969）「現代語の仮定条件法—「ば」「と」「たら」「なら」について—」『月刊文法』2・2, pp.148-

156

久野暉（1973）『日本文法研究』大修館書店

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

永野賢（1975）「第10章 「もしも私が家を建てれば……」の文法—条件表現「ば」「と」「たら」「なら」—」『新・日本語講座 2 日本文法の見えてくる本』汐文社, pp.141-152

野尻朱美・中島清（1976）「条件表現の「たら・れば・と」について その1.「と」と「たら」」『研修』187, pp.14-16

野尻朱美・中島清（1976）「条件表現の「たら・れば・と」について その2.「れば」」『研修』188, pp.14-16

McGloin, Naomi Hanako. (1976-77) “The speaker's attitude and the conditionals to, tara and ba” Papers in Japanese Linguistics 5, pp.181-191

鈴木忍（1978）『教師用日本語教育ハンドブック 3 文法 I 助詞の諸問題』凡人社

國廣哲弥（1978）「時間接続表現の意味—意義素の分析—」『国語と国文学』55・5, pp.159-173

豊田豊子（1978）「接続助詞「と」の用法と機能（I）」『日本語学校論集』5, pp.28-46

Inoue, Kazuko. (1978) “On conditional connectives”『日本語の基本構造に関する理論的実証的研究』文部省科学研究費特定研究報告, pp.19-87

Inoue, Kazuko and Iyoko, Hirata. (1978) “On connective particles in Japanese”『日本語の基本構造

- に関する理論的実証的研究』文部省科学研究費特定研究報告, pp.1-18
- Masamune, Mineko. (1978) “A Study on Tara, Ba, To, Nara in Japanese”『日本語の基本構造に関する理論的実証的研究』文部省科学研究費特定研究報告, pp.109-129
- 遠藤織枝 (1979)「条件を表す「ば」「たら」「なら」について」『東海大学紀要 留学生別科』2, pp.1-13
- 豊田豊子 (1979a)「発見の「と」」『日本語教育』36, pp.91-105
- 豊田豊子 (1979b)「接続助詞「と」の用法と機能 (III)」『日本語学校論集』6, pp.92-110
- 小出慶一・小松紀子・才田いづみ (1981)「ト・バ・タラー談話における選択要因を求めて一」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』4, pp.30-66
- 寺村秀夫 (1981)「条件の表現」『日本語の文法 (下)』国立国語研究所, pp.65-79
- 豊田豊子 (1982)「接続助詞「と」の用法と機能 (IV)」『日本語学校論集』9, pp.1-16
- 井上和子 (1983)「文の接続」井上和子編『講座現代の言語1 日本語の基本構造』三省堂, pp.133-151
- 小野米一・巴聖推 (1983)「条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の異同について—中国人学習者のために—」『北海道教育大学紀要 第一部 A 人文科学編』34-1, pp.13-24
- 国師三起子 (1983)「仮定の条件を表す言い方」『国際学会友会日本語学校紀要』7, pp.44-53
- 周復卿 (1983)「日本語の条件表現」『言語学論叢』2, pp.28-47
- 豊田豊子 (1983)「接続助詞「と」の用法と機能 (V)」『日本語学校論集』10, pp.1-24
- Akatsuka, Noriko. (1983) “Conditionals.” Papers in Japanese Linguistics. vol.6, pp.61-3
- 川口さち子 (1984)「ト・バ・タラ・ナラによる条件表現の分析—日本語初級教科書における提出順序再考—」『早稲田大学語学教育研究所紀要』28, pp.1-28
- 鶴田庸子 (1984)「日本語教育のためのタラとバの分析」『日本語教育論集』1, pp.29-48
- 松田剛史 (1984)「ト、テ、タラについて」『大谷女子大国文』14, pp.128-138
- 豊田豊子 (1985)「「と・ば・たら・なら」の用法の調査とその結果」『日本語教育』56, pp.51-64
- 蓮沼昭子 (1985)「ナラとトスレバ」『日本語教育』5, pp.65-78
- 田中俊子 (1987)「もしもピアノが弾けたなら—条件表現ナラとモダリティ—」『日本語教育研究論集』2, pp.109-130
- 蓮沼昭子 (1987)「条件文における日常的推論—「テハ」と「バ」の選択要因をめぐって—」『国語学』150, pp.1-14
- 田仁淑 (1989)「条件節をともなう複文」『東京外国語大学日本語科年報』11, pp.59-76
- 中島信夫 (1989)「日本語の条件文「…ナラ…」について」『甲南大学紀要 文学編』73, pp.102-124
- 吉川武時 (1989)『日本語文法入門』アルク
- 稲葉みどり (1990)「順接仮定条件文成立のためのモダリティ制約—日本人調査を通じて—」『ことばの科学』3, pp.67-88
- 稲葉みどり (1991)「日本語条件文の意味領域と中間言語構造—英語話者の第二言語習得過程を中心に—」『日本語教育』75, pp.87-99
- 仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

- 柴田和枝 (1992) 「日本語初級段階における条件表現の指導—条件文の継起性と文末表現を中心として—」  
『九州国際大学論集 教養研究』3 (2・3), pp.13-62
- 永井鉄郎 (1992) 「条件表現「と」「ば」「たら」の文末制限の実際に関する調査」荻野綱男編『言語行動  
論報告』2, pp.1-10
- 村松由起子 (1992) 「「と」条件表現におけるモダリティ」『雲雀野』14, pp.67-78
- 有田節子 (1993) 「日本語の条件文と知識」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版, pp.41-71
- 鈴木義和 (1993) 「ナラ条件文の意味」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版, pp.131-148
- 蓮沼昭子 (1993) 「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお  
出版, pp.73-97
- 益岡隆志 (1993) 「日本語の条件表現について」「条件表現と文の概念レベル」益岡隆志編『日本語の条件  
表現』くろしお出版, pp.1-20, 23-39
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 前田直子 (1995) 「バ、ト、ナラ、タラ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連  
文編』くろしお出版, pp.483-495
- 山口堯二 (1996) 『日本語接続法史論』和泉書院
- 益岡隆志 (1997) 「第3章 条件表現と文の概念レベル」『複文』くろしお出版, pp.105-120
- 赤塚紀子 (1998) 「第I部 条件文と Desirability の仮説」『モダリティと発話行為』研究社出版, pp.1-97
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 四元朋子 (1998) 「「と・ば・たら・なら」を含む条件文の文法性—日本語学習者の判断についての調査—」  
『福岡 YWCA 日本語教育論文集』8, pp.51-72
- サワリー・ワッタナチョンコン (1999) 「日本語とタイ語の条件表現のモダリティー—認知的モダリティー—」  
『NUCB journal of language culture and communication』1-2, pp.43-62
- スニーラット・ニャンジャロンスック (1999) 「タイ語母語話者による条件節「と・ば・たら・なら」  
の習得」『言語文化と日本語教育』18, pp.25-35
- ソルヴァン・ハリー (1999) 「ノルウェー語から見た日本語の条件表現—日本語を学習しようとするノル  
ウェー人を対象に—」『NIDABA』28, pp.108-117
- 中島悦子 (1999a) 「自然談話に現れる「と」「ば」「たら」「なら」—条件接続用法を中心に—」『国文学言  
語と文芸』116, pp.106-131
- 中島悦子 (1999b) 「条件接続用法における「と」「ば」「たら」「なら」の使い分け—書きことばと話しこ  
とばの実態調査から—」『国土館短期大学紀要』24, pp.77-103
- 藤城浩子 (2000) 「ト・バ・タラ—基本的な意味からの用法検証—」『三重大学留学生センター紀要』2,  
pp.25-38
- 由紀・ジョンソン (2000) 「条件文とモダリティー「ば」文の機能と意思表現の再考察—」『世界の日本語  
教育』10, pp.165-188
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版

- 堀内タ子 (2001) 「誘導推論と条件文」『Kwansai review』19・20, pp.115-127
- ソルヴェン・ハリー (2003) 「条件文の使い分けに関する調査を中心に」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』11 (別冊 「日本語教育はどこへいくのか」) pp.36-41, 58-63
- 高橋太郎 (2003) 「第 8 章 動詞が述語でなくなるとき」『動詞九章』ひつじ書房, pp.241-253
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』くろしお出版
- 堀恵子 (2003) 「韓国語母語話者を対象とする日本語条件文の習得研究」『言語と文明』1, pp.53-82
- 金宣伶 (2004) 「韓国語母語話者の日本語の条件表現「と・ば・たら・なら」の習得過程」『国文目白』43, pp.11-24
- 田中寛 (2004) 『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』白帝社
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』くろしお出版
- 白愛仙 (2004) 「否定的条件表現の意味・機能—「すると」「しないと」を中心に—」『日本文学論集』28, pp.84-72
- 堀恵子 (2004) 「バ条件文の文末制約を再考する—日本語母語話者に対する適格性判断調査から—」『言語と文明』2, pp.108-135
- ソルヴェン, ハリー・前田直子 (2005) 「「と」「ば」「たら」「なら」再考」『日本語教育』125, pp.28-37
- 高橋太郎 (2005) 「第 22 章 あわせ文 (複合文) (2) 条件節、ふたまた述語文」『日本語の文法』ひつじ書房, pp.263-273
- 井上和子 (2006) 「日本語の条件節と主文のモダリティ」『Scientific approaches to language』5, pp.9-28
- ソルヴェン・ハリー (2006) 「第 9 章 日本語学習者における条件文習得問題について」益岡隆志編『シリーズ言語対照 条件表現の対照』くろしお出版, pp.173-193
- 田中寛 (2006) 「レバ条件文における文脈的機能—論理関係と節末・文末表現に注目して—」『語学教育研究論叢』23, pp.167-190
- Alpysbayeva, Damira. (2006) 「カザフ語母語話者に対する条件表現の効果的な提示の仕方—「と・ば・たら」を中心に—」『日本言語文化研究会論集』2, pp.221-248
- 有田節子 (2007) 『日本語条件文と時制節性』くろしお出版
- 井上和子 (2007) 「日本語の主文のモダリティと条件節」『Scientific approaches to language』6, pp.39-73
- 郭毓芳 (2007) 「台湾人日本語学習者における日本語の条件文「ト・バ・タラ・ナラ」の習得について—後件制約の使用状況から—」『大阪大学言語文化学』16, pp.53-66
- 鈴木重幸 (2007) 「第 9 章 動詞 (4) 条件の形」『日本語文法・形態論』むぎ書房, pp.349-372
- 中島悦子 (2007) 『条件表現の研究』おうふう
- 堀恵子 (2007) 「日本語条件文の文末制約習得に及ぼす母語の影響—タイ語・英語・韓国語・中国語話者を対象とした文法性判断テストから—」『麗沢大学紀要』84, pp.101-126
- Mary, Ann Gaitan. (2007) 「フィリピン人の日本語学習者における条件表現習得—学習者の「タラ」と「バ」



- 条件表現の選択傾向」一『日本語・日本文化研究』17, pp.57-66
- 日本語記述文法研究会 (2008)『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版
- 前田直子 (2008)「もっと時間があつたら、時間さえあれば……条件の「たら」と「ば」一『言語』37-10, pp.28-35
- 松崎舞子 (2008)「条件表現の用法―使用実態の実証的検証―」『東京外国語大学日本研究教育年報』12, pp.85-99
- 井黒玲 (2009)「日本語の条件表現「タラ」と「バ」の使い分けの一考察」『富山大学国語教育』34, pp.26-18
- 谷口真樹子 (2009)「条件節「ば」の用法と文末制限について」『言語文化教育研究』4, pp.24-28
- 古屋憲章 (2009)「日本語教育のための文脈記述の可能性―条件表現「と」が用いられる文脈を例として一」『NIDABA』38, pp.118-127
- 前田直子 (2009)『日本語の複文―条件文と原因・理由文の記述的研究―』くろしお出版
- コルクサ アリ アイジャン (2010)「モダリティと条件文」『国語国文研究』138, pp.68-82
- Tsulbaatar, Onon. (2011)「特定課題研究報告 発見と協働を取り入れた翻訳授業の試み―「と」「ば」「たら」の使い分けをめぐる一」『日本言語文化研究会論集』7, pp.59-84
- 有田節子 (2012)「複文研究の一視点―一時制とモダリティの接点としての既定性―」『日本語文法』12-2, pp.43-64
- 張瑞雪 (2012)「日本語条件表現と中国語因果複句の対照研究―事実性とモダリティを中心に―」『岩大語文』17, pp.36-48
- 奈良夕里枝 (2012)「日本語の条件表現における後件のモダリティー制約」『フェリス女学院大学文学部紀要』47, pp.129-138
- 石川守 (2013)「日本語条件表現「と」「たら」「ば」「なら」の導入」『拓殖大学日本語紀要』23, pp.55-68
- リグス秀美 (2013)「現代日本語話者の条件表現の使い分け―機能言語学的視点からの一考察―」『日本語日本文学』23, pp.35-53
- 劉曉華 (2013)「言語空間モデルの視点から見た日本語の条件文―「ば」「たら」「と」の三形式を中心に―」『北九州市立大学国際論集』11, pp.13-37
- 宮部真由美 (2014)「望ましくないものをさしだすシナイト節の従属複文―従属節が「仮定条件」を表わす従属複文の分析―」『日本語文法』14-1, pp.3-19
- 有田節子 (2016)「日本語教育における(ノ)ナラ条件文の扱いについて―認識的条件文の重要性―」『言語科学研究』6, pp.13-23
- 梁婷綯 (2016)「韓国人日本語学習者の条件表現「～と」の使用実態―主節末の推量のモダリティを中心に―」『日本語教育』163, pp.32-47
- 風間伸次郎 (2017)「条件と継起の連続性について―疑似条件形式を中心として―」『北方言語研究』7, pp.35-68

宮部真由美（2017）『現代日本語の条件を表わす複文の研究—ト条件節とタラ条件節を中心に—』晃洋書房

劉曉華（2019）「日本語の条件表現「ば」「たら」「と」の意味特徴—コーパス調査に基づいて—」『日本語文化研究』8, pp.11-29

有田節子（2020）「第8章 条件付き命令・依頼文」田窪行則・野田尚史編『データに基づく日本語のモダリティ研究』くろしお出版, pp.143-162

前田直子（2020）「条件表現4形式使い分けルールの簡略化—日本語教育のための日本語研究をめざして—」『日本語文法』20-2, pp.40-56

## 方言研究

日高水穂（1999）「秋田方言の仮定表現をめぐって—バ・タラ・タバ・タツキヤの意味記述と地域的標準語の実態—」『秋田大学教育文化学部研究紀要』54, pp.45-55

櫻井真美（2002）「山形市方言の条件表現形式「ドギ」」『言語科学論集』6, pp.73-83

三井はるみ（2002）「条件表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』国立国語研究所全国方言調査委員会, pp.85-101

櫻井真美（2008）「山形市方言順接条件表現形式「ド」の用法」『言語科学論集』7, pp.71-82

内海優・思言（2010）「宮城方言の条件表現—青森・秋田方言との対照を中心に—」『東京外国語大学記述言語学論集』6, pp.55-62

竹田晃子（2012）「山形県米沢市方言・山形市方言における条件表現の研究」『大正大学研究紀要 仏教学部・人間学部・文学部・表現学部』97, pp.126-119

船木礼子（橋本礼子）（2014）「山口東部方言における条件表現形式「ト」」『神女大國文』25, pp.51-42

三井はるみ（2015）「九州西南部方言における順接仮定条件表現体系の多様性—熊本市方言と鹿児島市伊集院町方言—」中山緑朗編『日本語史の研究と資料』明治書院, pp.123-139

有田節子・岩田美穂・江口正（2019）「甌島里方言の条件表現」窪菌晴夫・木部暢子・高木千恵編『鹿児島県甌島方言からみる文法の諸相』くろしお出版, pp.157-181

三井はるみ（2019）「条件表現の全国分布に見られる経年変化—予測的条件文の場合—」『国語研究』82, pp.40-59

三井はるみ（2020）「条件表現の全国分布に見られる経年変化—認識的条件文の場合—」『國學院雑誌』121-2, pp.1-18

高木千恵（2023）「大阪方言における条件表現のバリエーション」『待兼山論叢 日本学篇』57, pp.1-18

## 歴史的研究

小林千草（1973）「中世口語における原因・理由を表す条件句」『国語学』94, pp.16-44

小林千草（1977）「近世上方語におけるサカイとその周辺」『近代語研究』5, pp.309-353

小林賢次（1987）「順接条件の接続助詞「ト」の成立と発達—狂言台本を中心に—」『上越教育大学国語研

究』創刊号, pp.3-14

小林賢次 (1996) 『日本語条件表現史の研究』 ひつじ書房

山口堯二 (1996) 『日本語接続法史論』 和泉書院

小林賢次 (2002) 「順接の接続助詞「ト」再考—狂言台本にみる近代語条件表現の流れ—」『国語と国文学』  
79-11, pp.107-119

小林賢次 (2004) 「『浮世風呂』におけるト・バ・タラ」『日本語教育学の視点—国際基督教大学大学院教授飛田良文博士退任記念—』 東京堂出版, pp.442-456

中島悦子 (2005) 「古代語の条件表現 (1) 仮定条件「未然形+バ」—『萬葉集』を資料として—」『21世紀アジア学会紀要』 3, pp.67-83

矢島正浩 (2006) 「落語録音資料と速記本—五代目笑福亭松鶴の仮定表現の用法から—」『国語国文学報』  
64, pp.132-116

中島悦子 (2007) 『条件表現の研究』 おうふう

矢島正浩 (2008) 「近世中期以降上方語・関西語における打消条件句の推移」『国語語彙史の研究』 27,  
pp.55-72

矢島正浩 (2010) 「ソレデハの発生・発達史に見る文化・文政期」『文芸研究 文芸・言語・思想』 169,  
pp.65-51

中村幸弘 (2011) 「古今集和歌の条件法—仮定条件とその後件—」『國學院雑誌』 112-5, pp.1-12

矢島正浩 (2012) 「条件表現史上における原因理由文の変化の意味」『国語国文学報』 70, pp.61-86

矢島正浩 (2013) 『上方・大阪語における条件表現の史的展開』 笠間書院

矢島正浩 (2023) 「原因理由史の再理解」『国語学研究』 62, pp.1-13

竹林栄実 (2024a) 「ト条件文・タラ条件文における文末モダリティ制約の史的変遷」『日本語学会 2024 年度春季大会予稿集』, pp.37-42

竹林栄実 (2024b) 「「動くと撃つぞ」型条件文について—近世期以降のト条件文における例外—」『日本語文法学会第 25 回大会予稿集』, pp.73-80

(たけばやし えいみ 大学院人文社会系研究科 博士課程 1 年)